



神奈川県

# 多様な指導方法を工夫した道徳教育



平成16年 3月

神奈川県立総合教育センター



# 目 次

序 章 多様な指導方法の工夫が求められる背景	1 P
第1章 体験活動を生かした道徳教育	
1 テーマについて	4 P
2 アンケート結果(平成10年 文部省)	4 P
3 研究の内容	
(1)「体験活動と道徳の時間の関連図」の作成	5 P
(2)実践事例より	
ア 実践事例1 学校行事と道徳(小学校1年生)	7 P
イ 実践事例2 「総合的な学習の時間」と道徳(小学校4年生)	11 P
ウ 実践事例3 職業体験学習と道徳(中学校2年生)	16 P
4 研究の成果	20 P
(1)体験活動と道徳の時間との関連	
(2)「心のノート」の活用について	
第2章 家庭や地域の人々の協力による開かれた道徳教育	
1 テーマについて	23 P
2 アンケート結果(平成10年 文部省)	23 P
3 研究の内容	
(1)実践事例より	
ア 実践事例1 ゲストティーチャーを補助的な資料として 位置づけた道徳授業(小学校1年生)	24 P
イ 実践事例2 ゲストティーチャーを中心的な資料として 位置づけた道徳授業(小学校3年生)	28 P
ウ 実践事例3 ゲストティーチャーを中心的な資料として 位置づけた道徳授業(中学校2年生)	30 P
4 研究の成果	32 P
(1)開かれた学校づくりと道徳教育との関連	
(2)地域の人々や保護者の参加・協力の意義	
(3)効果的な指導法について	
おわりに	35 P

## 序章 多様な指導方法の工夫が求められる背景

### 現在の社会と道德教育

子どもの道德性の発達は、子どもを取り巻く社会の影響を大きく受ける。今日の変動の激しい社会において、子どもの自然な道德性の発達を阻害している現象が多く指摘される。学校における道德教育での対応について、特に考慮しなければならない状況として、「小学校学習指導要領解説 道德編」では、次の5点をあげている。

- 1．家庭や地域の教育機能の低下への対処
- 2．社会全体のモラルの低下への対処
- 3．社会体験、自然体験の不足への対処
- 4．国際化、情報化、環境問題、福祉・健康などへの対処
- 5．社会の変化が求める学校の道德教育への課題

このなかで、1．2．3については、その現状を具体的に以下のように記している。

「まず、家庭や地域が今日に至るまでに果たしてきた教育機能が著しく低下していることである。すなわち、基本的なしつけや人としてしてはいけないことの指導や善悪の判断、そして思いやりや譲り合いの精神などは、本来家庭や地域ではぐくまれてきた。しかし、今日の家庭や地域においては、少子化がますます進み、地域に根ざした共同体も弱体化の方向に加速していることなどから、そのような機能が果たせなくなってきている。」

「第2は、児童が感化され影響を強く受ける社会全体のモラルが低下していることである。児童の道德性の育成に、大きな影響を与えている社会的風潮として次のようなものが挙げられる。

社会全体や他人のことを考えず、専ら個人の利害損得を優先させる。

他者への責任転嫁など、責任感が欠如している。

物や金等の物質的な価値や快楽が優先される。

夢や目標に向けた努力、特に社会をよりよくしていこうとする真摯な努力が軽視される。

ゆとりの大切さを忘れ、専ら利便性や効率性を重視する。

このような社会的風潮は、児童が本来持っている人間としてよりよく生きようとする力もまひさせられかねない状況にあるとあってよい。」

「第3は、児童の社会体験や自然体験が著しく不足していることである。現代社会は物が豊富にあり、機械文化が生活のあらゆる面に浸透し、個人主義的風潮が強まっている。児童の道德性は、豊かな関わりを通してはぐくまれるが、そのかわりに極端な偏りが指摘される。また、人工的・機械的なものとのかわりを深めても道德性はなかなかはぐくまれにくいという特性がある。豊かな道德性の育成には、直接人と人とが触れ合うことや生き物とのかわりを深めたり、ボランティア活動など

の社会体験を充実させることが不可欠である。社会の変化に伴って、そのような体験が著しく減少しつつある。」

これらを受ける形で、学習指導要領では、道徳教育改善の基本方針として次の3点をあげている。

- 1．体験活動等を生かした心に響く道徳教育の実施
- 2．家庭や地域の人々の協力による開かれた道徳教育の充実
- 3．未来へ向けて自らが課題に取り組み、共に考える道徳教育の推進

これらのことも鑑み、これからの学校教育においては、家庭や地域社会の教育機能の回復や社会全体のモラルの向上を願いつつ、指導に当たる教職員の意識の向上や指導方法の改善を促しながら、子どもの内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう努めなければならない。

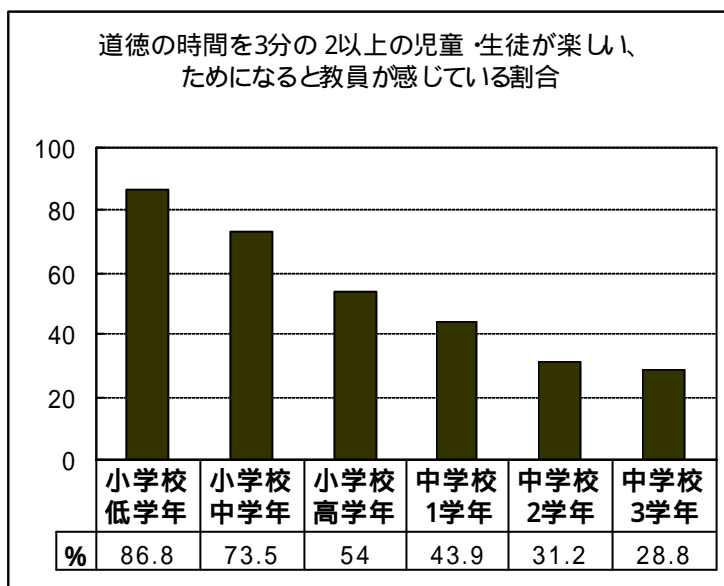
### 多様な指導方法の工夫

平成10年に当時の文部省が全国の小・中学校を対象に実施した『道徳教育推進状況調査』では、「道徳の時間を3分の2以上の児童・生徒が楽しい、ためになると教員が感じている割合」について、右グラフのように学年が進むにつれて低くなるという報告がされている。

小・中学生の時期は、自分の生き方を考え、道徳性の基盤を築いていく重要な時期である。ところが、前にも述べたが、現代社会はこのような子どもの道徳的成長にとって必ずしも適切とは言い難

い状況にある。かつて子どもの成長を援助するものとして様々な形で存在していた環境は大きく変化し、また、彼らが成長するために欠かせない様々な経験や体験の機会が失われつつあるのが現状である。

1時間1時間の道徳の時間は、道徳教育の「かなめ」の時間として位置づけられている。その授業を子どもにとって興味深いものとし、道徳的価値及び人間としての生き方についての自覚を深めていくことが求められている。子どもの興味・関心を高めていくためには、発問の技術などの指導方法の工夫を図ることはもちろんであるが、特定の指導方法を繰り返す行うのではなく、多様な指導方法の工夫も必要である。



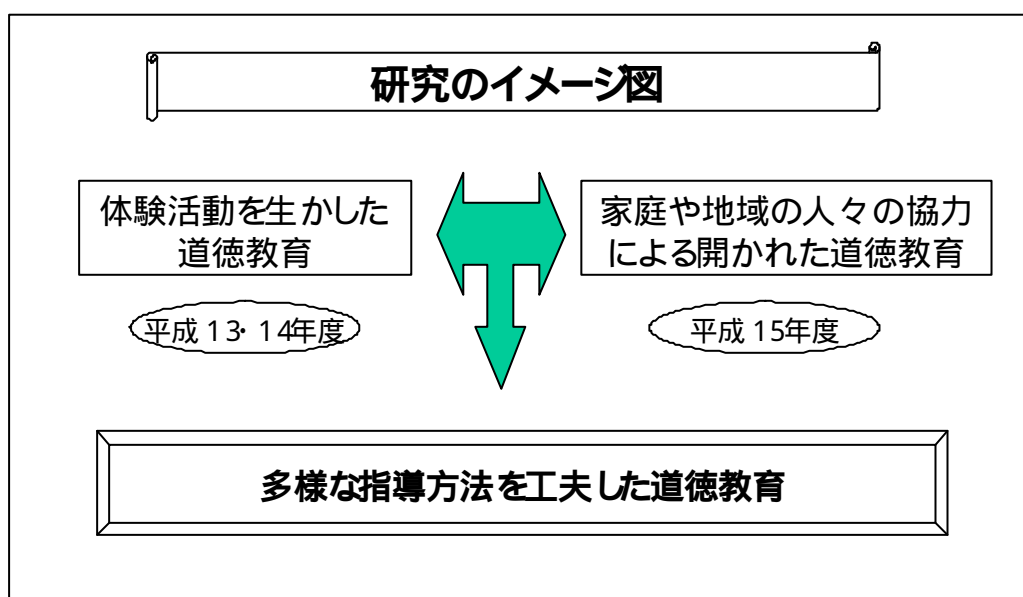
具体的には、小学校6年間、さらには小・中学校9年間を見通した関連的・発展的指導、学校教育目標や子どもの課題を踏まえた内容項目の重点的な指導の工夫、ボランティア活動や自然体験活動などの体験活動の活用、生命を尊重する心を育てる授業展開の工夫、自立心、規範意識、協力し合う態度を育てる道徳教育の充実など、様々な指導上の工夫を行うことがあげられる。

さらに、現在一般的に道徳の時間の資料としては読み物資料が活用されているが、多様な学習活動が展開できるよう、様々な資料の開発が期待される。詩や伝記、古典、論説などに加え、情報通信ネットワークを利用した資料開発などが考えられる。さらには、学校図書館や公共図書館、インターネットなどを活用し、子ども自らが資料を探して調べたりすることにより、道徳の時間の学習を一層発展させることもできる。

また、これまで道徳の時間は学級担任に任される傾向が強かったが、校長や教頭の参加、あるいは他の教員とのチームティーチングや学年間などでローテーションを組んだ協力的な指導、保護者や地域の人々の積極的な参加や協力を得ることも、学校の創意工夫を生かした授業展開や特色を生かした道徳教育を展開する上で効果的な工夫となるであろう。

#### 神奈川県立総合教育センターの取組

神奈川県立総合教育センターでは、道徳教育改善の基本方針の中からより具体的な取組が行いやすい「体験活動を生かした道徳教育」と「家庭や地域の人々の協力による開かれた道徳教育」に焦点をあて、調査研究協力員会を組織して研究を展開し、その成果について3事例ずつ検証を行った。



注) 調査研究協力員会・・・総合教育センターが県内の教諭に調査研究協力員を委嘱し、学校現場での実践を中心に教科や領域などに関する研究を行う組織

# 第1章 体験活動を生かした道徳教育

## 1 テーマについて

平成14年2月の中央教育審議会答申『新しい時代における教養教育の在り方について』では、「豊かな人間性の基盤を作る」の中で、道徳教育や体験活動の重要性について次のように記述している。「幼・少年期の体験は、その人の人格形成やその後の生き方に大きな影響を与える。学校、家庭、地域社会が一体となって、多様な体験活動の機会を提供するとともに、道徳教育の充実などを通じ、子どもたちに豊かな心をはぐくんでいく必要がある。」また、同年7月の中央教育審議会答申『青少年の奉仕活動・体験活動等の推進方策等について』では、「すべての青少年に奉仕・体験活動の機会を与えることが重要だ。」と提起し、「総合的な学習の時間」など、教育活動全体を通じた体験活動の充実を求めている。

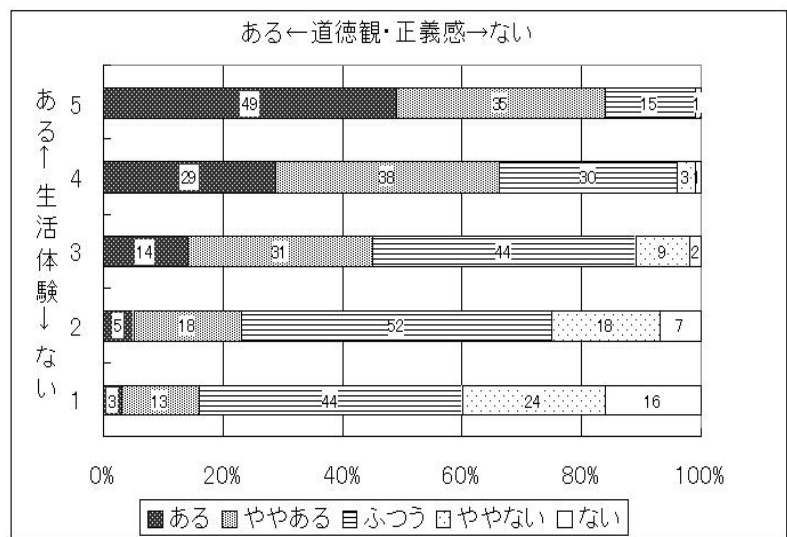
子どもの社会体験や自然体験の不足が指摘される中、各学校には、各教科、特別活動、「総合的な学習の時間」などに様々な体験活動が求められている。道徳教育においても、様々な体験活動を基盤にして、子どもの内面に根ざした道徳性の育成のために、心に響く深みのある教育が展開される必要がある。特に、道徳教育のかなめとなる道徳の時間については、子どもたちの体験活動が十分に生かされるような展開の工夫が求められる。体験活動を補充、深化、統合する時間として道徳の時間を位置づければ、その時間は道徳的価値の自覚を図る上で、大きな効果を発揮するのである。このような観点から、本テーマについて研究を進めた。

## 2 アンケート結果（平成10年 文部省） 「体験活動と道徳観・正義感」との相関関係図

文部省生涯学習審議会は、平成10年、約11,000名を対象に「子どもの体験活動等に関するアンケート調査」を行い、次のような結果を報告している。

### 「体験活動と道徳観・正義感」との相関関係について

「小さい子どもを背負ったり、遊んであげたりしたこと」、「ナイフや包丁で果物の皮をむいたり、野菜を切ったこと」といった生活体験の



度合いと「友達が悪いことをしていたら、やめさせる」、「バスや電車で席を譲る」といった道徳観、正義感の度合いを、それぞれ点数化しクロス集計したところ、「生活体験」が豊富な子どもほど、「道徳観、正義感」が身に付いている傾向が見受けられる、という指摘である。この調査結果は「体験活動を生かした道徳教育」を展開していく上で大きな示唆となった。

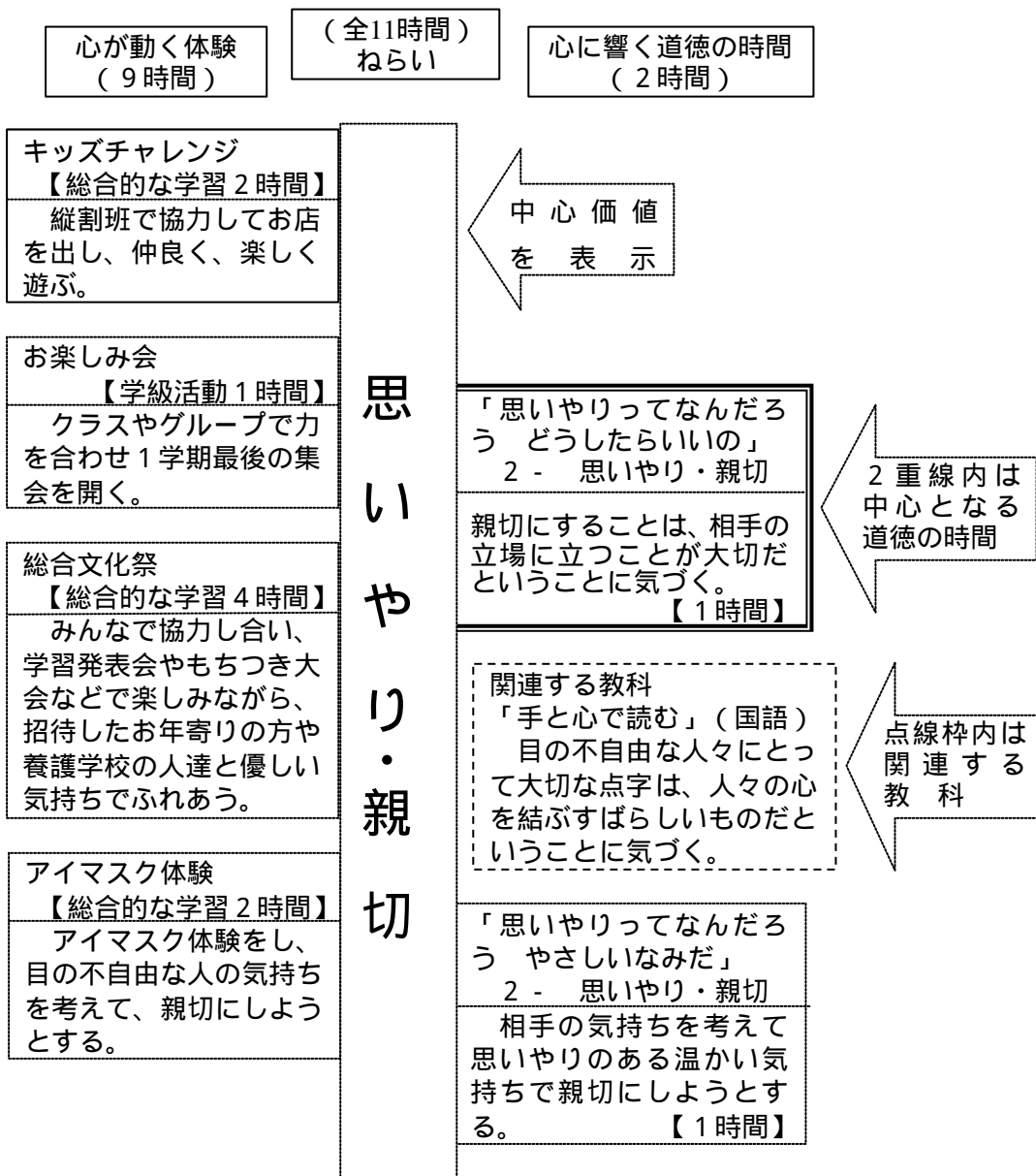
### 3 研究の内容

#### (1) 「体験活動と道徳の時間の関連図」の作成

体験活動を生かした道徳教育のかなめとなる道徳の時間の指導計画を立案するためには、指導する道徳的価値に見合った体験活動を選定し、道徳の時間をどこに位置づけるかを吟味する必要がある。つまり、道徳の時間と他の教育活動における豊かな体験活動とを明確に関連づけたカリキュラムの開発が必要である。そこで、道徳の時間の学習指導案の中に、「体験活動と道徳の時間の関連図」としてまとめた。

その際留意した点は、主題のねらいに合わせて、特別活動や教科の中から体験活動を取りだすことである。立案に当たっては、わかりやすく実用的なものを目指した。

#### < 「体験活動と道徳の時間の関連図」の説明 >





この関連図は、道徳の時間の年間指導計画と1単位時間の道徳の時間の中間に位置する指導計画として、大変有効であった。

関連図の長所を簡潔にまとめる。

- ・ 関連図を作成することによって、体験活動と道徳の時間のねらいを明確に把握することが出来る。
- ・ 中心価値をはっきりさせることで、体験活動と道徳の時間の評価の観点及び活動場面が明らかになる。
- ・ ねらいに向けて、各教科、特別活動、「総合的な学習の時間」など、すべての学習活動で体験活動を取り入れることが可能な図である。
- ・ 関連図にすることによって、体験活動と道徳の時間の関係がわかりやすい。

(2)実践事例より

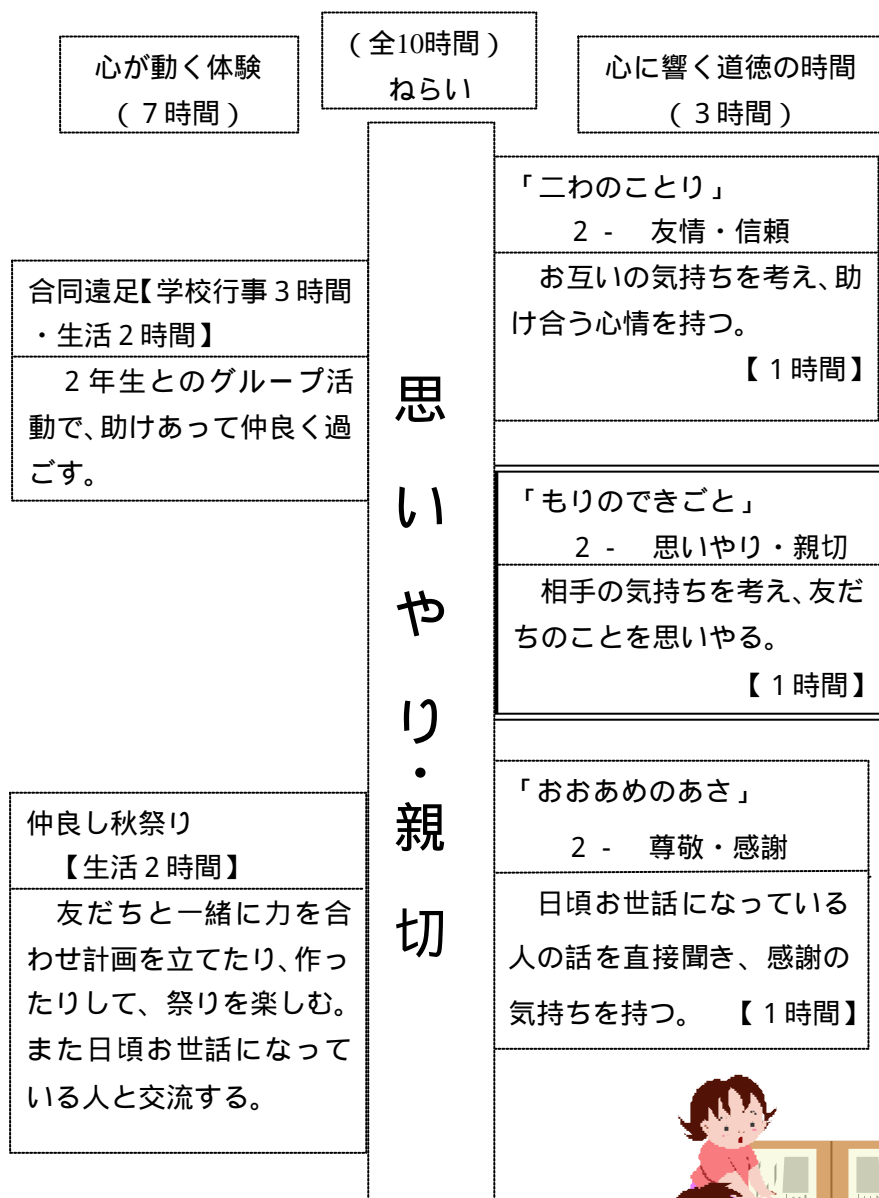
ア 実践事例1 学校行事と道徳(小学校1年生)

(ア)指導案

ねらい 互いに友だちの気持ちを思いやり、仲良く助け合っていく気持ちを育てる。

内容項目 2 - 思いやり・親切

関連図



展開

学習活動・主な発問	予想される子どもの反応・留意点
<p>1. 友だちに優しくしてもらった時のことについて発表する。</p> <p>2年生と合同遠足に行きました。2年生のお兄さんお姉さんはどうでしたか。</p> <p>2. 「もりのできごと」の話を聞いて、話し合う。</p> <p>きつねくんに負けているたぬきくんは、どんな気持ちかな。きつねくんはどうか。</p> <p>たぬきくんは、後ろを振り向きながら、どんなことを考えたのだろう。</p> <p>たぬきくんときつねくんは、どんな話をしたでしょう。</p> <p>3. みんなで歌を歌う。</p> <p>みんなで歌を歌いましょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2年生のお兄さんお姉さんが助けてくれた。</li> <li>・ 一緒に遊んでもらった。</li> <li>* 他者を思いやる気持ちに気づかせる。 (合同遠足のビデオ)</li> </ul> <p>たぬき</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 悔しいな。・ 負けたくないぞ。</li> <li>・ あとできっと抜かしてやる。</li> </ul> <p>&lt;きつね&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今日勝つよ。・ 負けるはずがないよ。</li> <li>* 資料の提示の仕方を工夫する。 (絵)</li> </ul> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">きつねくんのところに戻る</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 怪我したきつねくんのことが心配だ。</li> </ul> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">一度ゴールしてから戻る</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一番になりたいし、きつねくんも心配だ。</li> </ul> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">ゴールする</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今日一番にならなかったら、もうなれない。</li> <li>* ペープサートや吹き出しを用いて、場面の臨場感を出して話し合いを行う。 (人形)</li> <li>* 戻らない意見に傾いた時は、きつねの気持ちに気づかせるよう切り返しの発問を行う。</li> </ul> <p>たぬき</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 優勝よりきつねくんの方が大事だよ。</li> <li>・ 大丈夫。今、助けてあげるよ。</li> </ul> <p>&lt;きつね&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ たぬきくんが来てくれてよかったよ。</li> <li>・ ごめんね、優勝できなくて。</li> <li>* 役割交代を行い双方の心情を理解させ、よりねらいとする価値に迫れるようにする。 (お面)</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>* クラスのテーマソングを歌い、あたたかい雰囲気終わらせる。 (テープ)</li> </ul>

## もりのできごと

お日さまが暖かくて、とても気持ちの良い、秋の日のことでした。

森のお友だちのきつねくとたぬきくんは、森の仲間たちと楽しそうに遊んでいました。

そのうちに、誰が一番速く走れるか、競走することになりました。

うさぎ(以後「う」)「おーい、はじまるよー。みんながんばってねー。ぼくは応援してるからねー」

きつね(以後「き」)「よーし、今日もぼくが勝つぞ」

たぬき(以後「た」)「いいや、今日こそは 負けなぞ。きつねを動かしてやる」

う「でも、たぬきくん。きみは今まで一度だってきつねくんに勝ったことがないじゃないか。今日もやっぱり優勝するのはきつねくんさ」

た「僕、最近、すごく調子がいいんだ。もうきつねくんに勝てるかも」

う「たぬきくんがいくらがんばったって、無理無理。きみじゃきつねくんには勝てないよ」

た「うさぎくん、よく見てるよ。今日は絶対僕が優勝してやる」

き「すごい自信だな。でも僕だって負けなぞ」

よーい、ドン！

き「よし、今日も 優勝だ。このままゴールするぞ」

た「きつねくん 速いなあ。でも必ず動かしてやる」

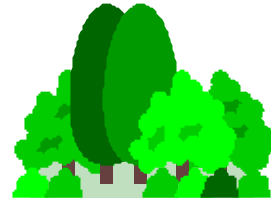
ところが、先頭のきつねくんがつるに足を引っ掛け、転んで怪我をしてしまいました。その間に、たぬきくんはきつねくんに追いついて先頭に立ちました。

き「いたたた。もう走れないよう」

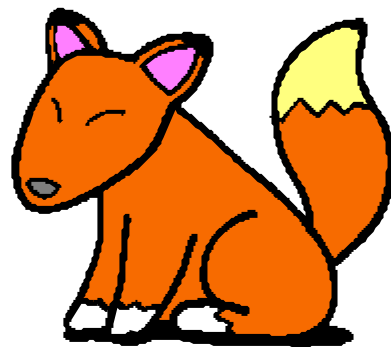
た「きつねくん、転んじゃったのか。今がチャンスだ。これで優勝できるぞ！」

先頭のたぬきくん、もうすぐゴールが見えてきました。

た「もうすぐゴールだ。でも・・・」(後ろを振り向く)



(自作資料)



(イ)実践を振り返って

(体験活動と道徳の時間について)

遠足という学校行事を体験活動の中心に位置づけ、実践を行った。この遠足は、合同遠足として上級学年とのグループ活動を取り入れている。今回は、「思いやり・親切」という道徳的価値にねらいを絞ったことで、教員として計画が立てやすく、児童にもわかりやすい指導の展開となった。遠足はたくさんの道徳的価値を含む体験活動であるが、体験活動を生かした道徳教育では、このように道徳的価値に照らしあわせて教育活動を見直すことが、効果的な指導のためには必要である。

(ゲストティーチャーを招いた道徳の時間について)

本実践事例では、合同遠足の後、中心となる道徳の時間を経て、「おおあめのあさ」という読み物資料を使用して道徳の授業を行った。その際、調査研究協力員の所属校の校門前で10数年間、朝の交通指導を行っている交通指導員の女性の方をゲストティーチャーとして招き、授業を展開した。その後、「仲よし秋祭り」という体験活動では、日頃お世話になっている人を招いて交流する場面があったが、ここで、当初の計画にはなかった児童の発案による「ゲストティーチャーの招待」が実現し、交流が一層深まった。これは、道徳の時間と体験活動を連続して展開した結果、「自分達にできることは何か」ということを児童が強く意識したからと思われる。また、教員及び児童に「思いやり・親切」という道徳的価値に対する意識の連続性が生まれたためと考えられる。



<授業の1場面(ペープサート)>

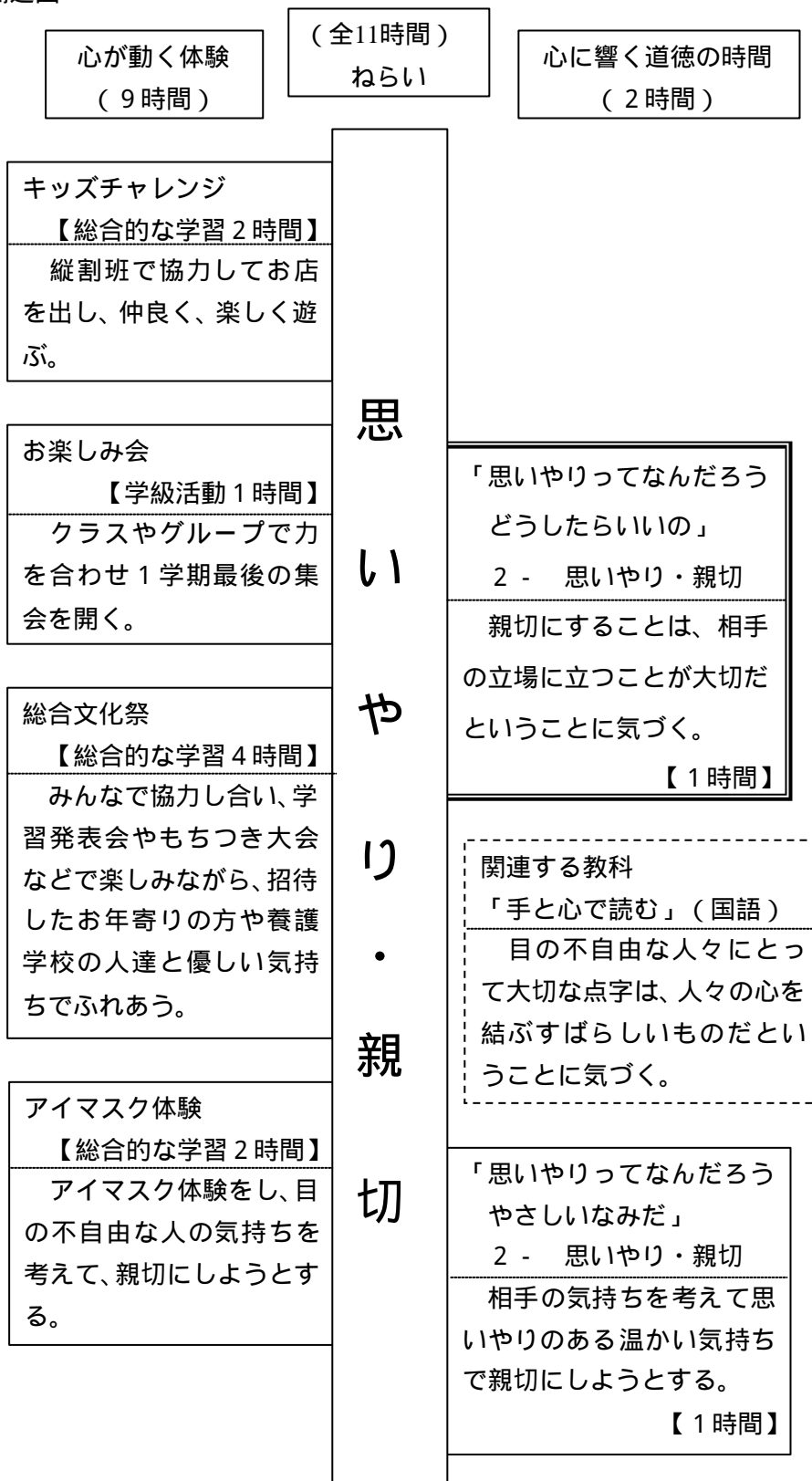
イ 実践事例2 「総合的な学習の時間」と道徳（小学校4年生）

(ア)指導案

ねらい 相手の気持ちを考えて、思いやりのある温かい気持ちで親切にしようとする心情を育てる。

内容項目 2 - 思いやり・親切

関連図



展開

学習活動・主な発問	予想される子どもの反応・留意点
<p>1．アンケートの結果を知る。</p> <p>今までに、人に親切にしたのにわかってもらえなかったり、良いと思ってしたことが喜んでもらえなかったりしたことはありませんか。</p> <p>2．資料「どうしたらいいの」を読んで話し合う。</p> <p>誠さんと陽子さん達のそれぞれの気持ちの変化を、心情曲線を使って考えてみましょう。</p> <p>それぞれの思いを大切にしながら、心情の変化を</p> <p>劇の練習を決めた時 誠さんが来ない時 来られない理由がわかった時 誠さんが出て行ってしまった時 の四つに絞って考えさせる。</p> <p>その後、陽子さん達は、どんな相談をしたでしょう。</p> <p>そのことを伝えた時、お互いにどんな気持ちになったでしょう。</p> <p>3．自分の生活を振り返る。</p> <p>あの時、親切を喜んでくれなかった人の気持ちを考えてみましょう。</p> <p>4．先生の説話を聞く。</p> <p>交流学級の友だちの書いた作文と担当の先生の話聞く。</p>	<p>・落とし物を拾ってあげたのに文句をいわれた。</p> <p>・席を譲ろうと思ったのに知らん顔をされた。</p> <p>* 2、3人に説明させ、ねらいについて意識させる。（事前にとったアンケート）</p> <p>（陽子さん達）</p> <p>みんなでがんばろう。</p> <p>約束を破るなんてひどい。</p> <p>かわいそうだから劇を外してあげよう。</p> <p>せっかく親切に言ってあげたのに。</p> <p>（誠さん）</p> <p>みんなでがんばろう。</p> <p>練習に行きたい。</p> <p>わかってもらってよかった。</p> <p>僕だって一緒にやりたい。</p> <p>* 思いのすれ違いをつかませる。</p> <p>* 親切にしたつもりでも傷つけているかもしれないことに気づかせる。</p> <p>（誠さんと陽子さんのペープサート）</p> <p>・自分勝手だ。・みんなでがんばろう。</p> <p>・休み時間に練習しよう。</p> <p>* 相手の気持ちを理解することの大切さを考えられるようにする。</p> <p>・よい方法を考えられてよかった。</p> <p>・またみんなでがんばろう。・ありがとう。</p> <p>* 2本の心情曲線が一致した気持ちのよさを感じとらせる。</p> <p>* 初めのアンケートにもどって考えさせる。</p> <p>（アンケート）</p> <p>* 交流学級の友だちの気持ちを感じとらせる。</p> <p>（交流学級の先生の録音テープ）</p>

## 「どうしたらいいの」

もうすぐ1学期も終わりです。陽子さんのクラスでは、集会係が計画をして最後にお楽しみ会をすることになりました。プログラムを決める時に、みんなの意見で、グループごとに出し物をする事になり、劇やペープサート、紙芝居、合奏などそれぞれのグループで相談して決めて、練習もしておくことになりました。

「ねえ、みんな、何をしようか。」

5班の班長の陽子さんは、わくわくしながらさっそく休み時間にみんなと相談することにしました。他の班もみんな楽しそうに話し合っています。



「歌と合奏がいいんじゃない。習ったことがそのまま出せるから。」

ゆきさんのこの提案にみんな賛成して決まりかかった時です。誠さんが、

「でも、劇もおもしろそうだよ。自分達で話を作ってさ。」

と言いました。陽子さんも、少くくらい大変でも何かとっても楽しいことをしたいな、と考えていたので音楽は少し物足りなく思っていたところでした。

「劇にしようよ。大変だけど放課後や朝早くきて練習すればいいと思うな。」

みんなもいろいろな楽しい劇が思い浮かんできたようです。5班は劇を出すことになりました。計画も練習もすぐに取りかかりました。誠さんもはりきっています。

お楽しみ会まであと3日になりました。今まで朝や休み時間に練習してきましたが、間に合いそうにもありません。そこで、今日の放課後、みんなが都合がいいので近くの公園に集まることになりました。

ところが、3時になっても4時になっても誠さんが来ません。他のみんなは全員来ています。文句も出始めました。陽子さんはゆきさんと誠さんの家まで行くことにしました。家に着いて呼ぶと、小さな弟と一緒に誠さんが出てきました。そして、

「おばあちゃんの調子が悪いから、お母さんがしばらく手伝いに行くんだって。放課後は弟の面倒を見なくちゃならないんだよ。」

と言いました。二人は顔を見合わせてどうしようかと思ひながら公園に戻ってみんなと相談することにしました。

翌日、学校に誠さんが来ました。陽子さんが元気な声で、

「誠さん大変そうだから、みんなで劇には出なくてもいいことにしたの。本番も楽しみに見ててね。」  
という、誠さんは、ちょっと驚いた顔をして、ぷいっと教室を出て行ってしまいました。どうしてだろう、せっかく大変そうだから親切にみんなで出なくていいって決めたのに...陽子さんは、席に着くとじっと考え込んでしまいました。

(自作資料)



(イ)実践を振り返って

(体験活動と道徳の時間について)

本実践は、「総合的な学習の時間」における体験活動と道徳の時間との関連を図ったものである。道徳の時間に自作資料を用い「思いやり」について考える授業を展開し、その終末に障害児学級の児童との運動会における交流を取りあげた。また、その後の総合文化祭では様々な人とふれあうことを体験し、国語「手と心で読む」では目の不自由な人達との心の通いあいについて学習し、「総合的な学習の時間」でアイマスク体験を行った。このような体験活動を連続して展開した結果、「自分達に出来ることは何か」ということを強く意識するようになった。その後、当初の計画にはなかった体験活動として、障害児学級におけるお楽しみ会への参加や、希望者による養護学校訪問が実現するなど、より一層交流が深まった。これは、道徳の時間が体験活動をより発展させ、教員及び児童に「思いやり・親切」という道徳的価値に対する意識の連続性が生まれたためと考えられる。

(評価について)

本実践では、体験活動を生かした道徳教育の指導を通して、評価についての工夫を行った。

児童は、体験活動と道徳の時間の連続の中で、少しずつその道徳性が育っていく。教員は、その都度児童の道徳性の評価を試み、様々な方法で継続的に児童の変容を観察、把握するべきである。調査研究協力員は観察による方法、質問紙による方法、作文やワークシートによる方法など、様々な方法で評価を試みた。変容には、行動に表れる変容もあれば、行動には表れない意識の深まりという変容もある。評価には、前述のような多様な方法はもとより、担任以外の他の教員との協力による複眼的な見方も大切である。

今回の実践において、次のような場面があった。1時間目の道徳の時間の前に行った質問紙の「親切・思いやり」に関する5項目のアンケートに、ほとんど何も書けなかった児童がいた。その児童の、ある日の給食時の思いやりのある行動を教員が認め、ほめたところ、その様子を友人が授業で発表した。その後、この児童は体験活動に積極的に参加し、すべての体験活動や道徳の時間が終了した後の質問紙には、5項目すべての問いに記入ができたということである。(次頁資料「質問紙」参照)

この例から、次のことがいえる。児童の道徳性の評価は、児童理解の上に成り立つものであり、教員には、児童に対するきめ細かな観察と共感的理解が求められる。また、児童は自己評価や、友だち同士で認め合うといった相互評価を積み重ねることにより、自らの成長を実感したり、次の実践への意欲を持つようになる。さらに、児童にとっては、他者からの評価は自尊感情の高まりへとつながっていく。教員が児童に与える日常場面での言動一つひとつが児童の励みとなり、力となるのである。

資料 「質問紙」

・質問項目

- Q 1 「親切」や「思いやり」とはどういうことだと思いますか。
- Q 2 「思いやりのある言葉や行動」とはどういうものだと思いますか。
- Q 3 今までに、思いやりのある言葉をかけたり、親切な行動をとったりしたことがありますか。
- Q 4 最近、思いやりのある言葉をかけてもらったり、親切にしてもらったりしたことはありますか。また、その時にどんな気持ちになりましたか。
- Q 5 最近、もっと思いやりのある言葉かけや行動をすればよかったな、と思うことはありますか。また、それはどうしてですか。

・児童の記述内容

	1時間目の道徳の時間を行う前	すべての体験活動と道徳の時間が終了した後
Q 1	・給食を運んでくれる。	・ありがとうやごめんねの言葉のこと
Q 2		・大丈夫と言ったりおばあちゃんを助けたりすること
Q 3		・S君に給食の時やさしくできた。
Q 4	・ない	・Nさんが、僕がS君にしたことを、親切とはこういうことなんだと思うといってくれてうれしかった。
Q 5	・ない	・もっとしたい。心があたたまるから。



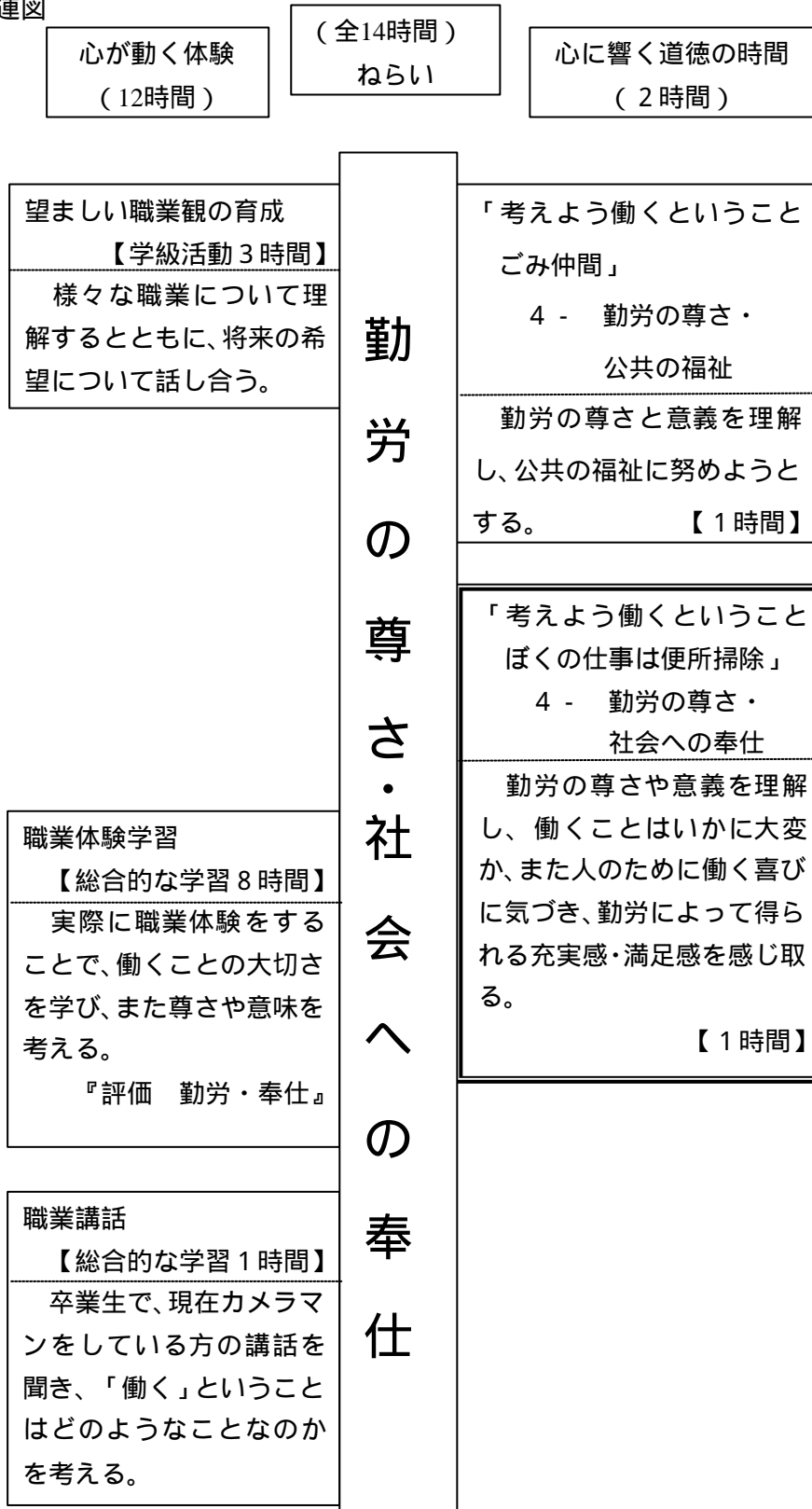
ウ 実践事例3 職業体験学習と道徳（中学校2年生）

(ア)指導案

ねらい 勤労の尊さを理解し、進んで公共の福祉と社会の発展のために尽くそうとする態度を養う。

内容項目 4 - 勤労の尊さ・社会への奉仕

関連図



展開

学習活動・主な発問	予想される子どもの反応・留意点
<p>1. 「働く」から連想する言葉のアンケート結果を見る。</p> <p>2. 「働く」ことの喜びについて記入し、発表する。</p> <p>身近にいる働く人を取材して得た「働く喜び」について発表してみましょう。</p> <p>3. 資料「ぼくの仕事は便所そうじ」を読んで話し合う。</p> <p>一人で便所掃除をしているとき、筆者はどんな気持ちだったでしょうか。</p> <p>おばあさんに「ありがたい ありがたい。」と言われたとき、頭を金づちでなぐられたようなショックを受けた筆者は、どんな気持ちだったでしょうか。</p> <p>世界一の便所掃除を目指して、1日3回も掃除をしているときの筆者は、どんな気持ちだったでしょうか。</p> <p>人のために働くことが自分のためにもなっていると実感したのはどんなときか。</p> <p>また、その時どんな気持ちだったでしょうか。</p> <p>4. まとめとして、感想を書く。</p> <p>5. 先生の説話を聞く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな言葉が連想されるなあ。</li> <li>* 拡大した模造紙をはる。</li>   <li>* 事前に取材させた内容を、ノートに記入し発表させる。 (「心のノート」)</li>   <li>・つらいなあ。やめたい。</li> <li>・承知で就いた仕事。でも、ばかりになる。</li> <li>* 勤労の意義をつかみきれず、気持ちが弱くなりがちな筆者に共感させ率直な意見をださせる。</li> <li>・苦勞をほめてもらえてうれしい。</li> <li>・苦勞を喜んでもらえてうれしい。</li> <li>・いいかげんだった。もっと 一生懸命やろう。</li> <li>* いやいや仕事をしていた自分を見つめ直して、人のために働く意義や値打ちに気づいていく筆者に共感させ、多様な価値観を引き出す。</li> <li>* 出された価値観は、板書して自己の価値観を見つめさせる。</li> <li>・人を喜ばせることができうれしい。</li> <li>・やりがいを感じて、どんどん工夫したくなる。</li> <li>* 人のために働ける自己の喜び、充実感・満足感をもつ筆者に共感させ勤労の意義を得させる。</li> <li>・文化祭の実行委員をしたとき</li> <li>・家事の手伝い</li> <li>・充実し、自分が豊かになれた気持ち</li> <li>* 学校・家庭・地域社会など生徒が集団のために寄与できそうな場を例示する。</li> <li>* プリントに書かせる。</li> <li>* どんな仕事でも人々の役に立つのだという自分の仕事を誇りとする発想を強めたい。</li> </ul>

## ぼくの仕事は便所そうじ

ぼくは、動物園に入って、最初の仕事は園内のそうじであった。しかし、その便所そうじがいやでいやでたまらない。明日にでもやめようと思いながら、しかたなくそうじをしていた。

そんな冬の寒い日のことである。ぼくは、かじかむ手で、いつものように便所をそうじしていた。次の便所へ行ったら、品のよいおばあさんが、ちょうど便所を使おうとしているところだった。ぼくはしかたないので、便所の外をそうじしていた。

すると、そのおばあさんが出てきて、手を洗いながら小さな声で言った。

「この便所はだれがそうじをしてくれたのかしら。とってもきれいになっていて、使っていて本当に気持ちがいい。ありがたい、ありがたい。」

そう言いながら、おばあさんは出て行った。

それを聞いたとき、ぼくは、頭を金づちでぶんなぐられたぐらいのショックを受けた。いやだ、いやだと思っていた便所そうじだが、きれいな便所なら、きっとだれかが喜んでくれる・・・と。それなら、ひとつ心を入れかえて、一生懸命にそうじを試みようと思ったのだ。

園内の便所をきれいにしよう。きれいにするには、どうしたらよいか。

「そうだ、一日一回やるところを、三回に増やせばいい。午前中に一回目のそうじをして、昼頃に二回目。閉園前に三回目をやればいい。」

ぼくは、さっそく実行に移した。

しばらくして、きれいな便所をお客さんに使ってもらおうと、わりとよごれないことに気がついた。便所がきれいだとよごれないのだ。きたないとよごれる。これが十六歳の少年の発見した真理だった。

今度は、かんづめの空きかんを拾ってきて、それにペンキをきれいにぬって筒を作り、園内に咲いている花を、ちょっと手折って便所にかざった。

すると、便所がますますよごれない。中には手紙を置いていく人もある。

——この便所はきれいにそうじがしてあって、とても気持ちがよかった ——  
と書いてあった。ぼくは本当にうれしかった。

それからは、ぼくは夢中になって便所そうじに精を出した。どうせなるのなら、世界一の便所そうじになってやろうと思い、がんばった。そうしているうちに、一年後、待望の飼育係の席が空き、ぼくは、人間の便所そうじから、動物の便所そうじに昇格したのだ。

おばあさんの「ありがたい、ありがたい。」という言葉は、ぼくにとって忘れられないものとなった。

この体験をふまえて、東武動物公園をつくるときに、ぼくがまず第一に考えたのは、お客さんにお手洗いを気持ちよく使ってもらおうということだった。

だから、園内には、各所にたくさんの便所をおいた。いつもきれいになるように心がけている。

「日本一便所のたくさんある東武動物公園」は、ぼくの自慢の一つだ。

(よりよく生きる2 学宝社) (「ぼくの先生はカバだった」 ポプラ社)

(イ)実践を振り返って

(体験活動と道徳の時間について)

体験活動は、「総合的な学習の時間」における職業体験学習を中心とした。中学生の時期は、汗して働いたという経験が少なく、そのため、働くことの大変さ、楽しさ、働いて感謝される喜びなどを感じる場面に接したことがある生徒は少ないであろう。そこで職業体験学習を通じて、自分の受け持った仕事の社会的意義に気づき、努力する態度を育てること、また、社会生活の発展や向上に貢献する気持ちを持つことが求められている。

道徳の時間で、生徒は仕事の大変さ、労働の喜びを考え、学ぶことはできたが、その後の実体験によって、それを現実のものとして感じる事となった。そういった意味で、体験活動前の道徳の時間は、勤労の意義や大切さを前もってイメージするのに貴重な時間となった。

道徳の時間後の感想の中には、労働に対する前向きな考えが多かった。この道徳の時間が、職業体験学習を行う上で意識の高まりとなり、積極的に体験に取り組む原動力になったといえる。そして、体験を経て、改めて仕事の大変さ、楽しさを実感するに至ったのである。

(評価について)

今回の学習指導要領の改訂に伴い、指導要録も新しい形式となった。その中の「行動の記録」の評価項目も変更された。変更された評価項目を以下に示す。

基本的な生活習慣	健康・体力の向上	自主・自律	責任感
創意工夫	思いやり・協力	生命尊重・自然保護	勤労・奉仕
公正・公平	公共心・公德心		

「行動の記録」は、学校における子どもの行動や態度に表れた成果を評価する。そして、この評価は現行の道徳教育の指導内容と特に関連が深い。「行動の記録」の評価は、すべての教育活動を通じて行われるが、今回の実践では、体験活動の際の評価を中心に行った。

具体的には、関連図にある評価場面の中心となる体験活動に評価項目を設定した。(関連図参照) 評価方法としては、体験活動の場面で観察法を実施した。あわせて、今回の実践の事前・事後に質問紙を用いて、アンケートも実施した。

- ・評価項目 「勤労・奉仕」
- ・評価の観点 勤労の尊さや意義を理解して積極的に職業体験学習に取り組もうとしている。
- ・アンケート項目

Q1 『働く』ことは大切なことだと思いますか？

Q2 『働く』と聞いて連想することは何ですか？

Q3～Q5 (略)

事前アンケートの、「『働く』ことは大事なことだと思いますか？」という問いに対して、「思わない。働く以外に大事なことはたくさんある。」と答えた生徒がいた。しかし、職業体験学習後のアンケートでは同じ質問に対し、「大事。大事なことは他にもあるが、『労働』は、一生において重要なこと。」と答えていた。また、「『働く』と聞いて連想すること」という問いに対しては、事前では、「労働・失業」と答えていたが、体験学習後では「労働・給料・家族との生活」と変化していた。この生徒は、実際に大手旅行代理店を訪問して、職業体験を行ったが、大変まじめに一生懸命に仕事に取り組んでいた。また、働くことにマイナス思考だったものが、やはり働くことは大事なことであり、家族との生活を成り立たせているものだと、考え方がプラスの思考に変化してきたということなどから、「勤労・奉仕」に一定の評価を与えてよいのではないかと。「行動の記録」は、生徒の行動面に表れたことの評価が中心であるが、評価の場面や観点を明らかにし、生徒の考え方を知るために、今回のようなアンケート調査を加え、心の変容を見取ることは、その評価の幅を広げるものである。

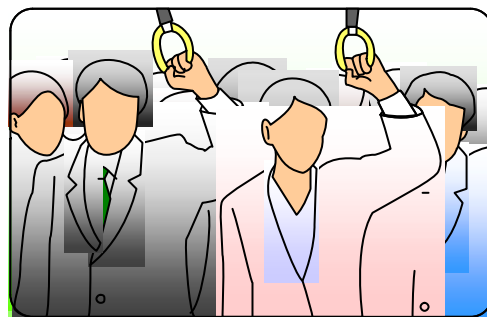
しかし、「行動の記録」の評価をこの体験活動を通してのみ評価することは、一面的である。日頃の清掃活動を観察するなど、継続的に評価を重ねていくことが重要である。そのためには、観察ノートのようなものを用意し、気づいたことを記入していくといったことも有効である。

#### 4 研究の成果

##### (1) 体験活動と道德の時間との関連

人間は、自分の身近なことからほど強い関心を持つ。実際に子どもが体験し、その体験活動を道德の時間の資料に活用すれば、身近に感じ、共感を得るような授業の展開が期待できる。また、道德の時間は、多様な体験が根底にあればあるほど心に響く授業となっていく。多様な体験をした子どもは、体験を通して得た自分の考えや思いを持っており、それによって自分の行為や内面を見つめ直すという道德の時間のねらいに迫ることが可能である。

体験は、例えば、満員電車の中で席を譲ったという満足感のあるものや、逆に席を譲れなかったという後悔の残るものもあり、いずれの場合も貴重な体験といえる。このように体験には様々な内容の体験があるので、道德の時間のねらいにあった体験を導き出す事が大切である。



また、体験活動と道德の時間の配列も考慮する必要がある。

道德の時間の後に体験活動を計画した場合は、道德の時間で学んだねらいとする価値が、体験活動の中で道德的行為として表れたり、深められた価値観として生かされる。その場合、道德の時間で学んだ内容を体験活動の中で「実践させる」のではなく、「実践があらわれやすい場」を意図的に計画していくことが必要であり、道德的行為が「できた」「できない」で判断するのではなく、子どもの意識がどれだけ深まったかを、教員が見取っていくことが重要である。子どもは、道德の時間で学ん

だ価値についての自覚は深化しているが、実践の場（体験する場）が用意されていることで、「～した方が良い」という実践的意欲から実践するという行為ができ、その行為により「～して良かった」と充足感を得ることができるのである。

体験活動を行ったあとに道德の時間を計画する場合は、体験活動の時間に道德的価値を含んだ場面に接しているため、道德の時間ではその価値の補充、深化、統合が図りやすく、子どものより主体的な学習が可能となる。そしてまた、道德的価値の自覚が深まった後、次の体験の場での実践も期待できる。

体験活動と道德の時間の関連図によって、計画性ができ、教員の意識の連続性が図られる。加えて本研究の実践では、いろいろな体験活動を関連づけることによって子どもの意識の連続性も図られたという報告がされている。しかし、教員は体験活動と道德の時間に関連があるととらえていても、子どもはそうとらえていない場合がある。そのような場合、実践事例1では道德の時間に体験活動のビデオを見せ、体験活動を意識的に想起させる工夫を行っている。

## （2）「心のノート」の活用について

「心のノート」は、教育活動全体を通じて行われる道德教育の充実を図るために用いる教材であるが、道德の時間では、その一部で補助的に活用することが求められている。そこで、今回の研究では道德の時間の導入や終末での活用を中心に実践を展開した。

導入では、写真を活用し、とかく「硬く」なりがちな道德の時間の流れを「リラックス」させたものにするように工夫された実践が見られた。加えて、写真に載っている活動が自分たちの活動と重なり合うため、興味を持って授業に取り組んでいたようであった。

また、事前に「集団における自分の役割」を書かせ導入に用いた例では、子どもの考えを教員が事前に把握した上で授業を行うことができた。それにより、子どもも終末に自分の考えの変わった点などの振り返りに活用できた。

別の例では、終末において「心のノート」を書かせずに、説話の一部として活用した実践があった。この授業では、自己の振り返りとして、道德的価値を子どもに押しつけることなく余韻を持って終わらせることに成功した。ノートなので、「書く」ことが基本となるが、授業の展開や生徒の実態に応じた多様な使用法として、示唆を与えるものである。

「心のノート」の活用において、重要視されていることの一つに、「学校と家庭・地域との連携を図るための活用」がある。実践事例3では、職業体験学習を控えた道德の時間で、生徒にあらかじめ家族やまわりの大人から『働く喜び』について取材させておいたものを活用した。（実際に取材して、「心のノート」p.101 に記した例を次頁表〈人生の先輩に『働く』ことの喜びとは何かを取材してみよう。〉に掲げる。）

この学習を展開したことにより、少なくとも『働く』ということについて、家庭で会話が持たれ、職業観や仕事に対する思いなどを子どもと考えたり、話したりする場面があったということは大きな



成果である。現在の社会は少子化・核家族化に伴う人間関係の希薄化などにより、家庭や地域の教育力の低下も危惧されている。人間として生きていく上で大切にすべき内容について、学校と家庭が共通理解を図り、心の教育に積極的に関わっていくことはきわめて重要だと考える。また、この実践により、教員も家庭の考えを知ることができ、「心のノート」を介してより両者が身近に感じられたのである。

< 人生の先輩に『働く』ことの喜びとは何かを取材してみよう。 >

お父さんの考え
自分の仕事が社会の中で役立っている
という喜び。その使命と達成感を満たした時の喜び、それに伴う収入を得た喜び。
そして家族の生計を支えているという喜び。

お母さんの考え
若い頃は自立できる喜び。今は自分自身
を生かせる喜び。

その他、「心のノート」の活用について、簡潔にまとめる。

- ・「心のノート」は道徳の一つの内容項目が4頁にまとめられており、「メッセージから学ぶ」「自分を見つめる」「実際に行って考える」といった構成を通して、自らの体験に基づいて書くことが多い。「体験活動を生かした道徳教育」と関連して用いることによって、より活用がはかれる。
- ・ノートの構成が小学校では2学年で1冊、中学校では3学年で1冊となっているので、その時に書いた内容を次年度見ることにより、自分の心境の変化や成長を振り返ることができる。
- ・「書く」という行為により、発表が苦手な子どもも自分の考えを明確にし、整理できる。

< 「心のノートを活用している場面」 >



## 第2章 家庭や地域の人々の協力による開かれた道徳教育

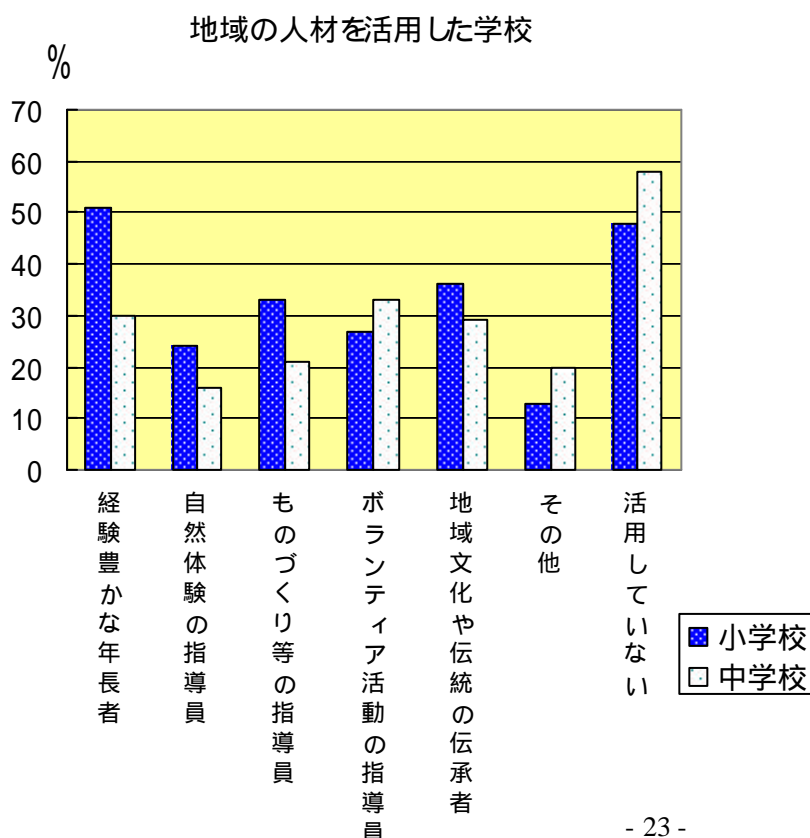
### 1 テーマについて

平成10年6月の中央教育審議会答申『新しい時代を拓く心を育てるために』-次世代を育てる心を失う危機-では、地域の人材を活用した道徳の時間について、以下のように大きな期待を寄せている。「すべての教員について道徳教育の指導力の向上を図ることは重要であるが、それだけでは限界があり、子どもたちが一目置く地域の人材の力を積極的に活用していくことが必要である。例えば、地域のスポーツ活動の指導者、伝統文化の継承者、企業の専門家など様々な職業の第一線で活躍している人、あるいは外国人留学生などが、それぞれの実体験に基づいてわかりやすく語りかける機会を設けることが大切である。そうした機会は、子どもたちに深い感銘を与え、ルールを守る大切さ、伝統や文化、地域や国への誇りと愛着、異質なものとの共生、勤労の尊さなどを身に付けさせる一助となると大いに期待される。」

また、今日低下していると言われるしつけや倫理観、社会性については、家庭や地域社会が果たす役割は大きく、連携しながら道徳教育を展開していく必要がある。

そこで、道徳の時間に変化を持たせ、家庭の協力や地域の人材などを活用し、生きた資料として学習効果を高めながら、子どもの道徳性を高めていくという観点に立ち、本テーマを設定した。

### 2 アンケート結果（平成10年 文部省）



文部省は、平成10年、全国の小・中学校を対象に、『道徳教育推進状況調査』を行い、「地域の人材を活用した学校」について左表のような結果を報告している。

本調査結果は6年前のものであり、「活用していない」が1番割合としては多くなっている。しかし、最近の道徳教育のニーズから地域の人材を活用した学校は増加していることが予想される。平成15年には同様の調査が行われ、そこでは地域の人材の分類も増加しており、結果と分析が待たれるところである。

### 3 研究の内容

#### (1) 実践事例より

ア 実践事例1 ゲストティーチャーを補助的な資料として位置づけた道徳授業（小学校1年生）

##### （ア）特色ある指導法について

###### 前時の体験活動の内容

生活科において、ネイチャーゲームの講師をゲストティーチャーにお願いした。ネイチャーゲームとは1979年アメリカのナチュラリスト、ジョセフ・コーネル氏により発表された、五感を通して自然を感じ、子どもと大人と一緒に自然にふれあうことができる野外活動である。

今回のテーマは、『学校大すき なかよしいっぱい』である。以下に、今回行われたネイチャーゲームの内容を簡潔に記す。

**【生きもの絵あわせ】** ...カードに描かれた、生きものの絵の八つのパーツを合わせて、パズルのように1枚の大きな生きものの絵を完成させる。完成した生きものの絵について解説を加えることで、その生きものの特徴を視覚的にとらえ、学習することができる。

**【カモフラージュ】** ...生き物たちの中には、周囲の木や葉や幹と同じような色をして、敵から身を守っているものがある。そこで、校庭の周囲の木や植え込みに、そっと置かれたいくつかの人工物を注意深く探す。

**【ミクロハイク】** ...虫メガネと糸をつかって、木や木の周囲、足もとに広がるミクロの世界への探検である。

**【フィールドビンゴ】** ...「木のみ」や「ぬけがら」などの自然の宝物を探しながらのビンゴゲームを行い、身近な自然のなかにこそ「本当の宝もの」が隠されていることに気づく。

みなさんは、林や公園で一本の木をととても好きになっ  
てしまったことはありませんか。

私は、子どもの頃自分の木をもっていました。　くんの木、  
さんの木というように、まわりの子どもたちもみんな一本ず  
つ、じぶんの木を持っていたものです。

どんな木を自分の木と決めたのでしょうか。

私の家の周りには、背の高い松の林がたくさんありました。  
私は、はだして土をふむのが大好きで、毎日、松林をかけめぐ  
って遊びました。

そんなある日、一本の木が私を呼んだように思いました。見上  
げると高くでどっしりとした松の木でした。その木は私が登るの  
にちょうどよい所に手をまわせるコブのある木でした。

その木は、私が登ることを許してくれたのでした。そして、てっ  
ぺんに登ろうとすると、枝がしなって登るのはこの高さまで、と  
教えてくれる木でした。

高い木の上で幹に両手と両足をまわしてしがみつくと、なんと  
もいえない笑いたくなるようなうれしい気持ちが風船のようにふ  
くらみました。

スズメがむらがって飛んでいきました。松葉や松ヤニの臭いが  
私をつつみ、海の音と松林をわたってくる風の音がまざりあって  
鳴りひびいて、そこはまるで木の下の様子とはちがうところのよ  
うに感じました。

木の上からは富士山や丹沢の山々がよく見わたせ、真っ赤に空  
を染めてしずむ夕日の姿はまぶしくてあざやかでした。私の胸は  
ドキドキしました。

木の肌にさわってみました。

枝に手をのばしてみました。

お日さまのあたたかさを感じました。

そして葉っぱや幹のにおいをかいで、人に話しかけるように話し  
かけてみました。さらに抱きしめたら、もっとたしかに伝わって  
きました。私の木がこれであることが。

それからは、毎日私の木に登りました。松林の中で出あう、草や  
花や鳥や虫たちにも、やさしく話しかけられるようになりました。

「ありがとう、またあした」と、いつもささやいていたのを思い  
出します。



(イ)指導案

ねらい 身近な動植物に親しみ、やさしい心で接しようとする心情を養う。

内容項目 3 - 自然愛

展開

学習活動・主な発問	予想される子どもの反応・留意点
<p>1. チューリップの咲いている写真を見て、話し合う。</p> <p>2. 資料「チューリップ」を聞いて話し合う。</p> <p>サコちゃんはどんな気持ちから「そうだ、いきをかけてあげよう。」と思ったのでしょうか。息をかけられたチューリップはどんな気持ちだったでしょう。自分がサコちゃんやチューリップになったつもりで、考えてみましょう。</p> <p>おふとんの中でぐっすり眠っているサコちゃんは、どんな夢を見ているでしょう。夢のお話をワークシートに書いてみましょう。</p> <p>3. ゲストティチャーの生き物に優しい気持ちを持ったたり、生き物に優しくしたりしたときの話を聞く。</p>	<p>・私のチューリップもあんなにきれいに咲いたらいいな。</p> <p>・世話をきちんとして私も花を咲かせたいな。</p> <p>*自分が今育てているチューリップと結びつけて考えられるようにする。</p> <p>*場面絵を提示しながら読み聞かせをすることで、場面の移り変わりがよくわかるようにする。</p> <p>「サコちゃん」</p> <p>・寒くてかわいそう。</p> <p>・だいじょうぶ。私が助けてあげるよ。</p> <p>「チューリップ」</p> <p>・ありがとう。サコちゃんやさしいね。</p> <p>・きれいな花を咲かせるね。</p> <p>*ふるえているようなチューリップを守りたいというサコちゃんの優しい心に気づくことができるようする。</p> <p>*主人公の気持ちに感情移入しやすいように、動作化、「サコちゃん」「チューリップ」の役割演技を行う。</p> <p>・チューリップがありがとうっていっているよ。</p> <p>・チューリップがにこにこしています。</p> <p>・チューリップとお友だちになって遊んだよ。</p> <p>・春になってきれいな花が咲いたよ。</p> <p>*ワークシートを用いて、サコちゃんの気持ちを一人ひとりがじっくり考えられるようにする。</p> <p>*生き物と人間との共生の観点からの話をお願いする。</p> <p>*読み物資料での話し合いと結びつくよう先生が補足する。</p>

## チューリップ

サコちゃんは、おばあさんからチューリップのはちをもらいました。そして、ベランダにおきました。・・・(中略)・・・

チューリップのつぼみは、さむくてふるえているようにみえます。

「そうだ、いきをかけてあげよう。」

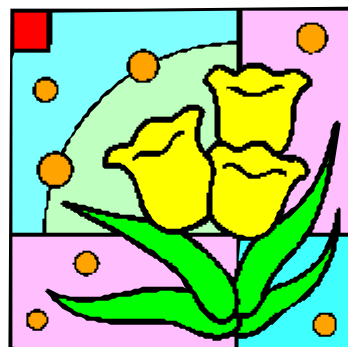
サコちゃんは、はあっと、いきをなんかいもかけてあげました。「あっ。」サコちゃんは、つぼみにくちびるをくっつけてしまいました。

サコちゃんは、へやにかえって、ふとんのなかへはいりました。そして、くちびるをべろりとなめました。

「うふふ、チューリップのあじがするみたい。」

サコちゃんは、ふとんをかぶると、ぐっすりねむりました。

(1ねんせいのどうとく 文溪堂 岡本笑子作「しりたいな」による)



(実践を振り返って)

本実践事例は、豊富な自然体験を持つ方の話を実際に聞くことにより、読み物資料で高められた心情が子どもたちに生きたものとなり、実践意欲が高まることをねらいとした。ゲストティーチャーは、すでに生活科でネイチャーゲームの指導を受け、子どもたちが大変親しみを感じている方である。その方には、終末に自分の子どもの頃の木に対する思いを話していただいた。

実際に、その後の子どもの様子を観察すると、以前よりもチューリップをいとおしみながら育てているなど、その成果が表れてきている。読み物資料によって高められたチューリップへのやさしい気持ち、ゲストティーチャーの話を聞くことで一層強まり、よりねらいに迫ることができたようである。

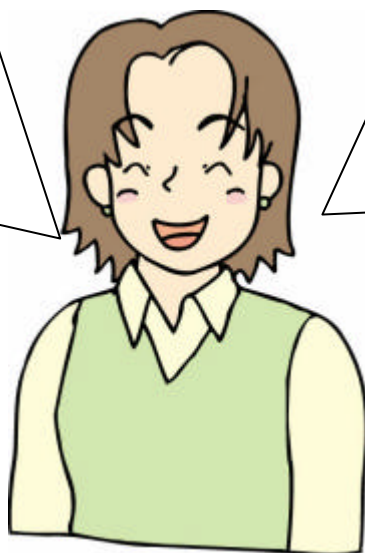
ゲストティーチャーの話を授業のどの場面でどのように活用していくかが課題であったが、終末の話で余韻をもって授業を終わらすことができた。今後も授業のねらいに即した活用が望まれる。

イ 実践事例2 ゲストティーチャーを中心的な資料として位置づけた道徳授業（小学校3年生）

（ア）特色ある指導法について

本時のゲストティーチャーの話の内容

生まれたものは必ず老いていきます。赤ちゃんの時はすべてお母さんやお父さん、大人の人に面倒を見てもらって来ました。誰かの手を借りて生きているんだなあ、と思います。だから、今健康で、働けるという事に感謝していきたいと思っています。



ケア・ワーカーとしてお年寄りの生活のすべてのお手伝いをしています。しかし、皆さんそれぞれ必要とする内容が違うので、お年寄りの気持ちを理解して、やって欲しいことをわかるようにしています。

今、お年寄りのお世話をしていますが、逆に昔の事や人生の事を教えていただいています。

（イ）指導案

ねらい みんなのために働いている人々の、人を支え助ける気持ちや苦労、喜びを知り、それらの人々に対して尊敬し感謝しようとする心情を養う。

内容項目 3 - ささえ合って

展開

学習活動・主な発問	予想される子どもの反応・留意点
1 .みんなのために働いている人にどんな人がいるか考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お店で働く人がいる。</li> <li>・工場で働く人がいる。</li> <li>・畑や田を作っている人もいる。</li> </ul> <p>* 社会科の学習との関連を配慮する。</p>
2 .特別養護老人ホームで働いておられる方の話を聞いて話し合う。 ゲストティーチャーの話を聞いて、どのような仕事か、どのような気持ちで働いておられるかを考えましょう。 <仕事の大変さや苦労> <仕事の喜び、誇り>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仕事には大変なことがたくさんあるんだな。</li> <li>・なぜ働くのかな。やめたくないのかな。</li> <li>・働いているとうれしいこともあるんだな。</li> </ul> <p>* ゲストティーチャーには、話の内容をまとまりごとに分けて話題にさせていただく。</p> <p>* 写真を拡大するなど、視覚に訴える。</p>



ゲストティーチャーの方をどのように思いましたか。グループで話し合しましょう。

3. ゲストティーチャーのメッセージを聞く。  
話を聞いてから、学習して考えたことや感想をまとめましょう。

- ・人のためになる仕事で大変だけどえらいな。
- ・仕事をすることで、自分もうれしくなるのだな。
- ・自分も人の手を借りていくんだな。
- ・お互いの助けあいが必要なんだな。
- \*自分たちも支えあって生きているということに気づかせる。

(実践を振り返って)

3年生は、教科や「総合的な学習の時間」の中で、自分たちの「まち」を取り上げるなど、低学年のころと比較して、その学習は地域への広がりを増している。道徳の時間においても地域を素材として生かすことにより、地域は子どもにとって身近なものとなり、事後の活動や道徳的な実践につながりやすくなると考え、授業を行った。

ゲストティーチャーとは、事前に何回か打ち合わせを行い、学級の子どもたちの実態を把握していただいた。授業では、子どもの発達段階に即したわかりやすい語り口で話をしていただき、なごやかな雰囲気のもと授業が進められた。

子どもからは「Kさん(ゲストティーチャー)は、お年寄りに大切にされているんだな。」「私も、Kさんみたいな人になりたいと思います。」などの感想が寄せられた。このことから、ゲストティーチャーの生の声と表情に直接接することで、感動・共感を伴って受け止めていることがわかる。特に、終末における「人間はみんな生まれて、老いていく。みんな同じに誰かの手を借りて生きている。」というメッセージは、本時主題の「ささえ合って」と関連し、社会の一員としての自分自身の存在の自覚をより促すことにつながったようだ。



イ 実践事例3 ゲストティーチャーを中心的な資料として位置づけた道徳授業（中学校2年生）

（ア）特色ある指導法について

前時の体験活動の内容

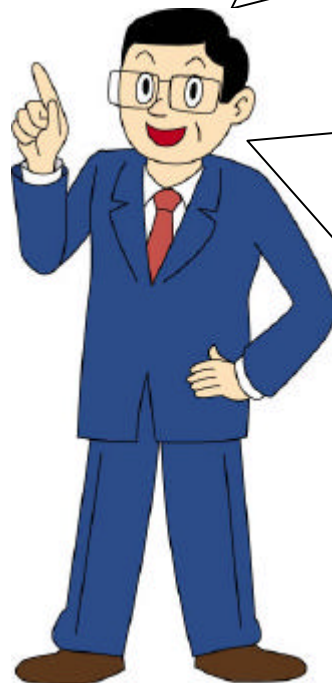
ゲストティーチャーの指導のもと、目隠しをして誘導される体験と誘導する体験を行った。テーマは「誘導する側の安全と誘導される側の安心」。眼の見えない方に黙っている訳にはいかない。危険があれば伝える。もちろん、相手にわかるように伝える必要がある。眼の見えない方も相手への信頼がなければ、動くこともできない。この体験では人と人との関係する力が試される。

本時のゲストティーチャーの話の内容

野球でキャッチボールをする時、相手の胸をめがけて投げますね。それが『いい球』です。会話にたとえると相手のハートです。相手のハートに届くと、相手からもあなたのハートに届く何かが返ってくるかも知れません。

自分の気持ちを素直に主張するには、自分に正直に、そして自分を大切にする『こころの習慣』を作りましょう。そのためには、まず自分を認めてあげることです。

自分を大切にする、相手を大切にするの第一歩はまず自分のことを主張してみる。そして相手の主張も認めることです。自分を主張するには、自分がわかっていないとできません。



皆さんの中には、「自分はダメだ。自分なんか嫌いだ。」という気持ちを持っている人がいますか。そんな人は、自分をいじめることをやめて、自分を許す「ま、いいか」という気持ちを持って下さい。ひょっとすると、自分はダメだと思っていることが、他人から見るとうらやましい素晴らしい内容だということもあるのです。

(イ)指導案

ねらい 人を大切にすることと自分を大切にすることは密接な関係にあることを考え、自己を肯定し、人と関係する力を高めていこうとする心情を養う。

内容項目 3 - 自他の生命の尊重

展開

学習活動・主な発問	予想される子どもの反応・留意点
<p>1. ゲストティーチャーの話から、本時のめあてに迫る。</p> <p>体験活動や話を通じて、「自分や人を大切にすること」について、今までの自分の思っていたことと比較して考え、ワークシートにまとめましょう。</p> <p>「人と関わる力」を高めるためには、今後、自分自身はどのように人と接していったら良いと思いますか。ワークシートにまとめましょう。</p>	<p>* 生徒と会話する形式で進めていく。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 人の意見を大切にしたい。</li><li>・ もっと明るく物事を考えた方がいい。</li><li>・ 人を大切にすることはまず自分を大切にすることから始まることがわかった。</li><li>・ 「心のキャッチボール」を大切にしていきたい。</li><li>・ 誰にでも平等に接していく。</li><li>・ 相手の気持ちを考えて行動していく。</li></ul>
<p>2. 上記2つの発問について、まとめた内容を発表する。</p>	<p>* ゲストティーチャーの話を参考にして考えさせる。</p>
<p>3. ゲストティーチャーからの授業を振り返ったメッセージを聞く。</p> <p>今日の授業の感想をワークシートにまとめましょう。</p>	<p>* 生徒が今後の生活に前向きな考え方ができるような話をしていただく。</p> <p>* 最後は先生がまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ アイマスク体験は恐かった。だけど、話を聞いて人を助けることは大切な事だと思った。</li><li>・ 自分一人では生きていけないことがわかった。</li><li>・ 他人とのかかわりについて、考えさせられた。</li></ul>

(実践を振り返って)

これまでの指導の中で、生徒は自分もまわりのクラスメートも大切な存在であることを、理屈では理解している。しかし、学校生活の中で相手の存在を否定するような言動や、自分を肯定できず不安をまわりにぶつけるといった姿がある。

そこで、痴呆をはじめ様々な症状の老人の方と日々向き合い、働いておられる方をゲストティーチャ

ーとしてお願いした。授業では、その方の優しさと厳しさに触れ、職業経験の中で感じたことを具体的に聞くことで、自他を大切にしようとする心情を育むことをねらいとした。

交通事故に遭い体が不自由となり、生きる希望を失いかけていた人が、生きたいという思いを受けとめてくれる人に出会い、「人は一人では生きていけない」と気づいた話などの人間の生に関する話は、生徒の心を大きく揺さぶった。

生徒の「自分を大切にすることはどういうことですか。」という事前アンケートからは、「わからない」や「素直になる」「無理をしない」といった抽象的な答えが多かった。しかし、同じ質問で行った事後アンケートからは、「自分を好きになる」「自分をよく知り、プラス思考に考える」といった前向きな考えが多く見られ、授業の成果がうかがえる。

また、今回はアイマスク体験などの体験活動に続けて道德の時間を実施した。これにより、学級活動と道德の時間のねらいが直接結びつき、生徒の心に響く実践となった。

#### 4 研究の成果

##### (1) 開かれた学校づくりと道德教育との関連

子どもに豊かな心を育てることは、学校教育の目標の一つであり、道德教育の大きなねらいでもある。このねらいを達成するためには、家庭や地域社会の理解と協力は不可欠である。加えて、具体的に授業に地域の人々の参加を求めたり、魅力的な地域教材の開発などに協力を得ることは、今日的な教育課題である「開かれた学校づくり」の一端として、学校と地域の垣根を取り払う格好の手だてとなりうる。

そのためには、教員が自らの意識を変え、自分も子どもと共に地域の人材から学ぶという考えに立つことが大切である。このことが、学校と家庭や地域との距離を近くし、道德教育に対する地域の人材の理解を得るきっかけとなる。さらにそれは、道德の時間が子どもにとって楽しい学びとなるなど、授業改善につながるはずである。

「開かれた学校づくり」における地域の人材の活用は、学校に「まねく」だけでなく、学校から「でかける」ことが相互の関係を深めるものになると考える。実践事例に地域の福祉施設（老人ホーム）で働くケア・ワーカーを招いての実践がある。その授業を通して、子どもの方から施設訪問を申し出てそれが実現した。訪れた子どもは入所している方に出会い、「福祉フェスティバル」という行事に参加し、この施設をより身近に感じていた。また、老人ホームの関係者の方にもさわやかな感動を与えたようである。このことは、地域の素材を用いることにより、学習の成果が地域に還り、学校・家庭・地域が一体となって道德性を育む土壌として高まっていることを示している。

## (2) 地域の人々や保護者の参加・協力の意義

道徳教育は、学校・家庭・地域がそれぞれの役割を果たしながら連携していくことによって大きな成果を得ることができる。その中でも、学校においてどのように道徳教育が展開されているかということ、保護者や地域の方々に理解していただくことは非常に大切なことである。授業に地域の人々や保護者を迎える場合は、その目的をはっきりさせ、それを伝えることによって学習の効果を高め、ねらいに迫ることができる。その際、効果的な活用場面や方法を地域人材などの特性と関連づけて考えることも大切である。

ゲストティーチャーの参加による授業では、展開の中で、教員以外の「生の声」を聞かせることによって、子どもの中に切実感・緊迫感を生み出すことになる。また、「本物」に触れることで学習意欲が喚起される。つまり、生きた資料から生き方について多くを学び、様々な形態による授業によって興味・関心が高まるのである。

道徳の授業では、子どもの多様な価値観をどのように引き出していくかが教員にとって大きな課題である。その点では、ゲストティーチャーの参加による授業は変化に富んだ展開が可能であり、様々な角度から子どもに道徳的価値について考えさせ、価値の自覚が深まることが期待できる。

地域の方と子どもとの相互理解を深めることも大切である。ゲストティーチャーにとっては、自分の地域や母校だからこそ語れる郷土への誇りや愛着があり、伝統文化の継承者だからこそ伝えられる技や歴史への思いがあるはずである。そして、自らも子どもとの触れあいから得るものがあると考えられる。子どもの感謝の気持ちからやりがいを感じたり、率直な感想から自らの考えと重ね合わせたり、日常では気づかない面の発見もあるかもしれない。これらのことから教員や学校側の工夫として求められるのは、一方向の「協力」から、双方向の「連携」という形を作っていくことである。このことは、地域の人材活用を継続する一つのポイントといえる。

学校においてどのように道徳教育が展開されているかを、保護者に理解していただくことは非常に大切であるが、その効果をあげるために「保護者の参加・協力による授業」が考えられる。教員と保護者が一体となって授業を創りあげ、協力体制をとりながら相互理解を深めていくのである。

子どもたちの価値観は、その子を育ててきた家庭の価値観であるといっても言い過ぎではない。「子どもの道徳性を育む」という道徳教育の目標に近づくために、家庭教育の重要性は非常に高い。家庭との相互連携に向けては、日常の交流が十分になさなければならない。価値観が多様化している現在、共に子どもを育てるという意識をもって、保護者からの協力を求めたい。親にとってかけがえのない子どもへの協力は基本的には惜しまないはずである。そういった意味でも、親が子どもに対する思いや願いを語ったり伝えたりすることを大切にしたい。

中学校の実践事例に以下のような例がある。親が我が子への思いを託したメッセージ(コメント)を活用して授業を行い、終末において生徒が親に返事の手紙を書くという展開である。学年が上がるにつれて親子の会話や意思疎通の機会の減少がいわれているので、意図的にメッセージや手紙を活用してそのような場を設定した。生徒からは次のような感想が得られた。「親のメッセージはちょっと恥ずかし

い気持ちでしたけど、うれしかった。」「コメントを読んだ時、もう少しで泣きそうになった。」「親が自分のことをこのように思っているとは知らず、ビックリした。」などである。子どもにとって、自分の親がどのようなことを望み、親にとっても、子どもの手紙から、どのようなことを考えているのかを知る良い機会となった。そして、お互いの良さを発見する場となったのである。

この実践は、事後の保護者会で触れ、生徒の感想などは学級通信で紹介した。保護者や地域との協力的体制を充実させていくためには、日常の交流が不可欠である。そのためには、生徒の実態を踏まえた学校の道徳教育のねらいを伝え、啓発していくことが求められる。今後は計画的に保護者会などで道徳教育について扱い、道徳性の育成において、家庭教育が大切なことを訴えていくことも必要である。

### (3) 効果的な指導法について

地域の人々や保護者の参加・協力には、いろいろな方法が考えられるが、今回の実践事例では、授業に参加・協力するだけでなく、指導案作りの計画から参加した例もあった。いわゆる授業「参加」から、授業「参画」である。子どもの実態を普段から把握し、育てたい道徳性から授業のねらいを設定するのは教員の役目である。そして、ねらいや教員の思いをゲストティーチャーに伝え、双方の連携により良い授業を構築していくことが必要である。

授業のスタイルとしては、ゲストティーチャーの語りかけなどを、展開における中心的な資料とする場合と、読み物資料などの補助的な資料として位置づける場合とがある。

中心的な資料とする場合は、子どもの思考が深まるよう、ゲストティーチャーから発問や問いかけをしていただくことが効果的である。また、子どもの集中力をつなげていくためにも話をいくつか分割して行うなどの配慮も必要である。また体験談も「講話」という形式より、ワークショップのような「対話」という形式の方が、子どもと向き合いその心情を揺さぶるものがある。

読み物資料などの補助的な資料としてゲストティーチャーを活用することは、道徳的価値について一般化する上で効果的である。但し、授業の効果を高めるためには、ゲストティーチャーの登場の場面や主題との関わりについて十分な検討が必要になってくる。

今回の実践は、ゲストティーチャーの指導のもとに生徒が体験活動を行う例が多く見られた。体験活動をゲストティーチャーとともに行うことは、双方の距離が近づき、理解が深まるという利点がある。また、体験活動自体に道徳的価値が含まれる事が多く、道徳の時間と関連づけることにより、道徳の時間で学んだ道徳的価値の自覚から、道徳的实践力の育成に発展する可能性もある。

最後に教員にとって大切なことは、授業を「コーディネート」することである。教員がコーディネーターとして、ゲストティーチャーの話を整理し、確認し、時には板書することも必要である。ゲストティーチャーの話をうまく引き出しつつ、また子どもの表情や状況を把握しながら、授業での舵取り役を果たすことが肝要なのである。

## おわりに

道徳教育は、学校の教育活動全体を通して行うべきものである。その道徳教育を、学校の教育活動だけでなく、家庭や地域の人々と共通理解を図りながら行うこと、そして子どもとともによりよく生きようとする姿勢を持つことは大変重要である。

今回の3年間にわたる研究は、道徳教育における多様な指導方法の工夫に焦点をあてて行った。しかし、道徳教育の指導方法は、多様な形式の読み物資料を生かすなどの学習の「形態」や、1時間の「展開」など、様々な工夫が考えられる。「体験活動を生かした道徳教育」においても、子どもの体験を直接資料化するなど、今後を検証の余地を残したものもある。

新学習指導要領の改訂の基本方針の一つに、「自ら学び、自ら考える力を育成すること」がある。道徳教育においても、自分自身をみつめ、主体的に判断できる子どもの育成を目指している。教員は、よりよく生きたいと願っている子どもを、様々な角度から見守り、支援し、そして励ます存在でありたい。多様な指導方法は、子どもの道徳性を養うための一つの方策である。子どもが将来出会うであろう様々な場面、状況において、適切な行為を主体的に選択していくことができるように、今後も道徳教育の研究を進め実践していくことが望まれる。

### 道徳教育 調査研究協力員会

#### < 調査研究協力員 >

(平成13年度)

藤沢市立石川小学校	五十嵐康子
相模原市立淵野辺東小学校	朝野 秀典
秦野市立渋沢小学校	森 基夫
小田原市立豊川小学校	加藤久美子

(平成14年度)

茅ヶ崎市立萩園中学校	松下 文彦
座間市立栗原中学校	田附 和枝
秦野市立北中学校	小瀬村 浩
大井町立湘光中学校	石井正二郎

(平成15年度)

鎌倉市立深沢小学校	吉田 眞弓
厚木市立上依知小学校	山口 晴子
三浦市立南下浦中学校	増田 忍
箱根町立仙石原中学校	神保 るり

(所属は当時)

#### < 総合教育センター >

研究開発課 教育専門員	松村 徹
-------------	------

## 参 考 文 献

- 押谷 由夫 「『行動の記録』の趣旨と改訂のねらい」（「指導と評価」2001年3月号）図書文化  
神奈川県立総合教育センター 研究集録第21集・第22集・第23集（平成13・14・15年度）  
七条 正典編著 2000「改訂 中学校学習指導要領の展開 道徳編」明治図書  
文部科学省 「道徳教育推進資料 小学校 心に響き、共に未来を拓く道徳教育の展開」  
文部科学省 「道徳教育推進資料 中学校 心に響き、共に未来を拓く道徳教育の展開」  
「道徳教育2000年2月号・6月号」 明治図書

### 多様な指導方法を工夫した道徳教育

発行日 平成16年3月30日  
発行者 鈴木 宏司  
発行所 神奈川県立総合教育センター（カリキュラムセンター）  
〒251-0871 藤沢市善行7-1-1  
電話 (0466) 81-1659（研究開発課 直通）  
ホームページ <http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/>



古紙配合率100%再生紙を使用しています



神奈川県

神奈川県立総合教育センター  
カリキュラムセンター（善行庁舎）  
〒251-0871 藤沢市善行7-1-1  
TEL (0466)81-0188  
FAX (0466)84-2040

教育相談センター（亀井野庁舎）  
〒252-0813 藤沢市亀井野2547-4  
TEL (0466)81-8521  
FAX (0466)83-4500

ホームページ <http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/>